れた小さな苗木が山の斜面で育っていました。サリサリストアの帳簿付けと、商品管理も彼の妻が担当していて、毎月４０００ペソのあがりがあるそうです。このまま順調に組合資金を増やし、組合が組合員の農産物を買い上げる力をつけたい、とのことです。そのためにも、ソーラードライヤーと小さな倉庫を早く持ちたいと考えていて、今、事業の残金で建設できるか調整中です。マリオ先生を中心に住民たちのやる気を盛り立てていく形で私達の関わりがうまくいけばと願っています。

ところで、女性自立支援ですが、チボリ族女性組合‘ＣＯＷＨＥＤ’の委員長メルチさんと、伝統工芸品店長のハスミンさんのお二人と話し合いを持ちました。少数民族の女性達の技術向上プログラムをＦＩＤＲ基金に申請することにし現地からの企画書を待っているところです。現地の女性達は、様々な分野についてミーティングを重ね、みんなで納得して進んでゆく体制をとっていますので、一見のんびりにみえても着実に思えます。伝統工芸品の売り上げが芳しくないことなど問題も山積していますが、一つ一つ克服していけるよう応援していきたいと考えています。他にも伝えたいことはたくさんありますが、また次の機会に譲りたいと思います。たまたま日本に生れた私達と、たまたま向こうに生れた彼らを結ぶＨＡＮＤＳを通して、今年も元気に何が出来るかを考え、行動していきたいと思っています。世界中の人々が楽しく有意義に平和な毎日が送れますように。

ラムブソン組合の住民と森田さん

ビラーン族一行・マニラへ（続報）

会報１９号でもお伝えしましたが、教会が国内各地で先住民族の実状をアピールする目的で定めた 10 月第 2 日曜の Tribal Sunday に、ビラーン族の１８名（ビラーン族初の修道士 Br.ウイリアムと Fr.ブランドが引率）もマニラ首都圏の教会 5 ヶ所を訪ねました。ビラーンの民族衣装やダンスなどの伝統文化を紹介するとともに、森が消滅した山岳部で生きる厳しさへの理解と協力を求めました。今回で 3 回目を迎えるマニラ訪問を通じて、いくつかの教区の市民から寄付等による協力も得られるようになりました。

マニラがあるルソン島の北部山岳地帯コルディレラ地方にも先住民族居住地域があります。日本のテレビが伝えたマニラのクリスマス報道で、市民が山の先住民族を目にし、その存在を意識する唯一の機会がクリスマスであるというような説明をしていました。この時期に施しを求める貧しい人々の中に山を下りてくる先住民族がかなりいるようです。

ミンダナオでも、ビラーンの子どもたちが施しを求めてでなく、仕事を得てジェネラルサントス市に出てくることを願って、これからも住民とともに自立の道を考えていきたいと思います。

（資料： Br. ウイリアムの報告、CMB 機関紙 GONGNo.4 等）

キアミのソーラードライヤー建設は土地所有権問題で中断

HANDS が関わるコミュニティーの中で、最寄りの町からもっとも遠い不便な地点にあるキアミでは、住民組合でサリサリストア(日用品売り場)を作ったり、校舎建設、カラバオの共同利用など、当会の支援を着実に生活向上に生かしていますが、ソーラードライヤー建設については土地所有権問題が浮上して目下中断しています。住民がコミュニティー施設用として、CMB に使用を認めたはずだった建設用地が、いつのまにか低地人(入植者)の土地として登記されていたことがわかって、住民たちは先祖伝来の土地を絶対取り戻すとの決意で、1997 年制定の「先住民族の権利法」に基づき、先住民族問題を扱う地元バランガイの協議会に訴えているそうです。「心配しないで下さい。きっと住民達は自分達の主張を貫徹します」と、キアミ担当の Fr. ブランドの手紙は住民への信頼を伝えてきました。住民達はとりあえず今コンクリートの材料となる砂利を川から少しずつ運んでいるそうです。これまでもビラーン族の首長や住民は、入植者との間に起きた多くの土地に絡むトラブルに対して、時には血を流して対処してきました。Fr.ブランドまで巻き込まないようにとの配慮か、或いは解決への自信があるためか、かれにもこの問題には介入しないようにと言っているようです。

（事務局：山崎）